中間評価論文要旨

メルヒェンによる道徳教育の可能性
—『グリム童話集』の「赤ずきん」を手がかりとして—

北　村　理　佳※

１．研究の目的と方法

今日，わが国における小中学校の道徳教育は，「学校の教育活動全体を通じて行うもの」とされながら，基本的には，週一時間設けられた「道徳の時間」において「読み物資料の利用」によって行われている。この方法は，子どもが，道徳用副読本などにおける数ページの資料を読んだ後，教師の発問やワークシートの設問に対して登場人物の気持ちを考えて応答する，もしくは，シートに記入する，といった授業過程によるものである。しかし，その方法では，道徳を概念的知識で教えることばかりが先行し，子どもたちの純粋な感情に訴えることができず，他者を思いやることのような道徳的行為の原動力となる想像力が育まれないのではないかと懸念される。このような現状に鑑み，本研究では，道徳的意図のもとに作成された読み物資料（および，それに類する教材）に対して，文学的な豊かさをもち想像力を育てることのできる，メルヒェンによる道徳教育の可能性を提示したいと考える。

世界中のメルヒェンのなかでもとりわけ有名なのは，グリム兄弟によって19世紀に編まれた『グリム童話集』であろう。しかし，今日よく知られているグリム童話には，絵本や読み物になる過程において，メルヒェンの意味を無視した再話やテクストの変更を施したものも多くみられ，それらが社会的に受容されているという実態も存在している。

しかし，これまでの日本における道徳教育研究では，道徳的意図のもとで作成した物語の発問研究に重点が置かれてきたために，物語の本質と本来有する道徳的な意味について取り扱った研究は見られない。特に，グリム童話を含めた文芸としてのメルヒェンと道徳教育とを同時に見据え，メルヒェンの文学性や特質を学問的に見極めて，それを道徳教育に応用した研究は充分になされていない状況

※道徳教育学

であるといえる。

そこで，本研究の課題は，メルヒェンとしての『グリム童話集』の価値を問い直し，とりわけ「赤ずきん」を手がかりとしながら，特に小学校低学年児童を対象に，子どもの深い道徳性を育むメルヒェンによる新たな道徳教育のあり方を提案することとした。その課題を達成するために本研究では，文芸学的な視点から『グリム童話集』原典における「赤ずきん」のテクスト各版の分析を中心に，文献研究の方法をとる。

はじめに，戦後のわが国における道徳教育を概観した上で，長期にわたって利用が続けられている読み物資料の実態を明らかにする。また，わが国における『グリム童話集』の初期の受容について概観し，グリム童話のなかでも特に有名となった［赤ずきん］の受容に焦点をしぼり，その物語の有してきた具体的な意味について論じる。

つづいて，『グリム童話集』のメルヒェンにおける位置づけについて歴史的背景から論じ，また，『グリム童話集』序文に示されるグリム兄弟のメルヒェン観から，童話集の有する役割を考察する。そして，『グリム童話集』における「赤ずきん」という物語について，グリム以前のペローとティークの作品，およびグリム以後に再話が行われた「赤ずきん」の類話と比較しながら，その物語の特徴を明確にする。

さらに，『グリム童話集』における「赤ずきん」の原典テクスト各版の具体的な比較分析を行い，版を経るごとのグリムの加筆・修正の様子を明らかにし，物語がどのような意味合いをもつものに至っているのかを示す。最後に，テクスト分析の結果に対して，リュティ（1969）によるメルヒェンの様式理論を適用し，「赤ずきん」に保たれる文芸的な特質と道徳性とについて検討することによって，メルヒェンにおける道徳教育の可能性を考究する。

2．論文の構成

序　章　本研究の枠組み

第一章　わが国の道徳教育におけるメルヒェンの受容

　第一節　戦後日本における道徳教育

　第二節　読み物資料を用いた道徳教育

　第三節　わが国における『グリム童話集』の「赤ずきん」

第二章　メルヒェンにおける『グリム童話集』の位置づけ
　第一節　『グリム童話集』の成立背景
　第二節　グリム兄弟のメルヒェン観
　第三節　『グリム童話集』における「赤ずきん」
第三章　「赤ずきん」にみるメルヒェンの様式
　第一節　メルヒェンの定義とその様式
　第二節　「赤ずきん」のテクスト分析
　第三節　メルヒェンとしての「赤ずきん」解釈
終　章　本研究のまとめと今後の課題

3．論文の概要

第一章では，わが国における戦後の道徳教育とメルヒェンの受容について論じた。1958年に「道徳の時間」が特設され，1964年から67年にかけて文部省から『道徳教育の指導資料』が発行されたことにより，戦後道徳教育の方針は「特設主義」「価値志向主義」でかたまり，その指導は現在まで，主として「道徳の時間」における「読み物資料の利用」によって行われてきている。文部科学省の全国の小中学校を対象とした調査（2003）によれば，読み物資料はこれまで約50年間にわたって，わが国の道徳教育における特権的な教材であるといえるが，民間出版社の発行する道徳用副読本について具体的に調査したところ，それらは概して，非文学的な話によって，イソップ寓話に象徴されるような道徳的価値や概念を教えるものとなっていた。副読本内にはメルヒェンはほとんど採用されておらず，例外的に扱われたメルヒェンは，寓話同様に教訓を示すことに焦点化した編集が行われたものであった。また，明治期においてグリム童話は，学校外で道徳的価値を教えるための物語として子どもの教育のために利用されていたが，そこではそのメルヒェンとしての価値は無視され，いわば読み物資料と同様に扱われていた。須田（2003），小澤（1985）の調査によれば，「赤ずきん」は，明治期から現在にいたるまで，わが国においてもっとも有名で人気のあるグリム童話のひとつであるといえる。しかし，その「赤ずきん」は，再話段階で，メルヒェンの本質を無視し，かなり意図的につくり変えられたものであった。

第二章では，『グリム童話集』の成立背景を振り返り，メルヒェンにおけるその位置づけを確認した。19世紀においては，ドイツ・ロマン派の詩人たちが中世の

文学や自国の伝統・伝承を回顧し，メルヒェンに注目し始めたことにより，グリム兄弟もメルヒェン蒐集を開始するに至ったといえる。また，『グリム童話集』が相次いで刊行されたのは，ビーダーマイヤー時代において，子ども用読み物としてのグリム童話の大きな需要が生まれていたからであった。『グリム童話集』序文に示されたメルヒェン観によれば，グリム兄弟にとって『グリム童話集』は，民間に伝わる純粋な［子どものためのメルヒェン］を蒐集したものであり，それは同時に「教育の書」としての機能を果たすことをも目的に置かれたものであった。また，グリムは，メルヒェンには国境を越えた普遍性があると考えていた。「赤ずきん」は，フランスのペローによってはじめて書承文芸として書きとめられたものであったが，その物語は赤ずきんが狼に飲み込まれたところで終わり，最後に教訓が添えられたものとなっている。また，ティークは『小さな赤ずきんの生と死』という戯曲作品を発表しているが，そこに登場する狩人は，グリムの「赤ずきん」に影響を及ぼしている。グリム兄弟はペローやティークの作品の存在をよく知っていたが，「赤ずきん」がもともとドイツの民間にも伝わるメルヒェンであると考え，それを『グリム童話集』にも採用したのだと考えられる。また，民間メルヒェンである「赤ずきん」の類話は，グリム以後にも確認されているが，『グリム童話集』が登場した後はそれがメルヒェンの大きな規範となり，今日に至っている。

第三章では，『グリム童話集』の「赤ずきん」について，初版から第7版（決定版）の原典テクストを比較し，それらのテクストにおけるグリムによる加筆・修正の状況を分析し，文芸学的な解釈を行った。「赤ずきん」のテクストは，改版にともなって，口語体から文語体へと変わり，グリムの文学的感性による文章の脚色が施され，また，より道徳的な価値の強調されたものに変化していった。しかし，その一方で，テクストは民間に伝わるメルヒェンとしての性質も保つといえるものであった。リュティ（1969）の様式理論によれば，民間メルヒェンには「一元性」，「平面性」，「抽象的様式」，「孤立性と普遍的結合の可能性」，「純化と含世界性」という5つの原理が認められるが，『グリム童話集』第7版の「赤ずきん」においても，これらの性質が確認された。また，物語全体を見渡すと，グリムの「赤ずきん」は，リュティ（1985）がメルヒェンに認める「主人公は禁令を犯し，対立者に出会い，援助者によって救済され，最後には幸福になる」という筋書きを保つものであるとわかる。すなわち，主人公である赤ずきんはお母さん

からの言いつけ（禁令）をやぶることによって，対立者である狼に出会い，おばあさんとともに飲み込まれてしまうが，援助者である狩人によって救済され，最終的には幸せを手にするのである。つまり，赤ずきんがお母さんの言いつけを守らなかったことは，メルヒェンの筋がめざす幸福にとっては「必然的な行い」だったのであり，このことは「赤ずきん」というメルヒェンが，細かな道徳的振る舞いや教訓を教えるための物語ではないということを証明している。そして，「赤ずきん」には，グリムが改版の過程で強調していったごく身近な道徳的教訓とは別に，生きるための根本的な問題に関わる道徳性が存在していた。メルヒェンの様式をもつ「赤ずきん」が提示するのは，教訓ではなく［人間の生き方］である。メルヒェンは，人間の生活全体を見渡しながら，人間という存在が他者の援助を頼りながら生きていること，また，自己を発展させていくためには自分とは異なった対立者や敵対者を必要としていることを示している。さらに，メルヒェンは，他者への思いやりにつながる想像力を育成する文学作品であるといえる。素朴な様式によって成り立つメルヒェンだからこそ，読者（受け手）の想像力が自由に広がってゆくのである。またそれと同時に，メルヒェンとは，途中にどのような困難が待ち構えていようとも最後には主人公が幸福になって終わる話であり，心に生じた不安を心地よい安心へと変化させることから，特に幼い子どもの信頼という気持ちを育てる役割も果たすものである。

本研究では，『グリム童話集』における「赤ずきん」の原典テクストに立ち返り，初版（1812）から第7版（1857）の全版にわたる分析を試みた。その結果，教訓物語として読まれる傾向の強い「赤ずきん」において，メルヒェンの様式が保たれていることが明らかになり，そこに，グリムが物語に付与した道徳的教訓とは別に，メルヒェンの本質における道徳性を見出すことができた。そして，このような文芸学的な分析を通じて，文学性を損なわないテクストによる道徳教育の可能性を提示したことによって，わが国の道徳教育における非文学的な読み物資料の指導に対して警鐘を鳴らし，さらに，相手を思いやる想像力を育むという新たな道徳教育につながる視点を提供できたといえる。

4．今後の課題

本研究では，『グリム童話集』の「赤ずきん」を手がかりとして，メルヒェンのもつ道徳性を明らかにした。しかし，メルヒェンは「赤ずきん」にとどまるもの

ではないため，他のグリム童話を含めたさまざまなメルヒェンについて，さらに文献研究を推し進めてゆく必要がある。

また，本来メルヒェンとは語り伝えられてきた声の文芸であり，紙に書かれたテクスト分析のみによって，その価値のすべてを測ることは不可能である。そのため今後は，メルヒェンの語りの方法やその実践を広く視野に入れた多角的･総合的な道徳教育の研究を行いたいと考えている。

5．主要参考文献

Mamiya, Fumiko. "Textveränderungen der kleinen Ausgabe der Kinder-und Hausmärchen (KHM) der Brüder Grimm - Rotkäppchen (KHM26) -", *Die Deutsche Literatur,* Heft 102, 1999

マックス・リュテイ（小澤俊夫訳）『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社，1969年。

マックス・リュテイ（小澤俊夫訳）『昔話その美学と人間像』岩波書店，1985年。

小澤俊夫『昔話の語法』福音館書店，1999年。

須田康之『グリム童話〈受容〉の社会学―翻訳者の意識と読者の読み―』東洋館出版社，2003年。